Italo Svevo

LA COSCIENZA DI ZENO

1923

目　次

1　はじめに……5
2　序　章……9
3　煙　草……13
4　父の死……53
5　私の結婚をめぐる物語……103
6　妻と愛人……261
上巻　訳者あとがき……357

下巻目次

6　妻と愛人（承前）
7　ある商事会社の物語
8　精神分析
下巻　訳者あとがき

1

はじめに

私は、この物語のなかで、ときおり手厳しい言葉を浴びせられている医師です。精神分析に通じる者なら、患者が私にいだく反感をどう判断すべきかは知っているはずです。

私は精神分析についてここでお話しするつもりはありません。それについてはこの本のなかで、もう十分に語られているからです。私の患者に自伝を書くように勧めたことにかんしては、お詫びせねばなりません。精神分析の研究者たちは、きっと、そのあまりの奇抜さに眉をひそめることでしょう。しかし彼は年老いていたため、追憶することによって彼の過去がよみがえるのではないか、また、自伝が精神分析への効果的な導入になるのではないかと私は期待したのでした。私の考え方は、思いがけない結果をもたらしてくれたので、今日でもなお有効だと思われます。もしこの患者が、いちばん肝心なときに治療から逃げ出して、この回想録についての私の長く忍耐強い分析の結実を妨げなければ、その成果はさらに大きなものとなっていたでしょう。

私はこの回想録を復讐のために出版し、彼を困らせたいと思います。けれども、彼に知ってほしいのは、もし彼が治療を再開するのなら、出版によって私が得ることになる

多額の報酬を彼と分かち合う用意があるということです。彼は自分自身についてじつに好奇心旺盛のようでした！　彼がここに積み上げてきた多くの真実と嘘にかんする解説にどれだけ驚かされることになるか、彼がわかっていればよかったのに！……

S医師

2

序章

私の幼年期を振り返るだって？　あれから五十年以上の歳月が流れ、老眼になった私の目に宿る光が、幾多の障害に妨げられることがなければ、遠いその時代まで見通すことができるかもしれない。高く険しい山のように立ちはだかるのは、私が過ごしてきた年月と時間だ。

医師は、あまり遠い時代までむりに思い出そうとしないように進言した。最近のことがらでも、彼らにとってはそれなりに貴重であり、とくに昨晩の空想と夢が大切だという。だが、多少は手順を踏む必要があるだろうし、ゼロから始めるためにも、私は医師と別れるやいなや、精神分析の論文を買って読んだ。彼がまもなくトリエステを発って長いこと留守にするので、ただたんに、その仕事を容易にしたかったのだ。論文を理解するのはむずかしくはなかったが、とても退屈だった。

昼食後、私は手に鉛筆と紙きれをもって、クラブチェアにゆったりと体を横たえる。私は頭のなかから一切の緊張を排除したので、顔にはおだやかな表情が浮かんでいる。私の思考は私自身から切り離されているかのようだ。私にはそれが見える。上昇し、下

降する……、しかしそれ以上の活動はできない。それは実際は私の考えていることであり、思考の実体を明らかにする義務があることを喚起するために、私は鉛筆をつかむ。すると私の眉間にしわが寄る。なぜなら、すべての言葉は多くの文字で成り立っており、現在が荒々しく立ち上がって過去をくもらせるからである。

昨日、私は深い放心状態に入ろうと試みた。そのような実験ののち、私はとても深い眠りに落ちた。その結果得られたのは、大きな安らぎと、睡眠中に何か重要なものを見たという感覚だけだった。だがそれがなんだったか忘れてしまい、二度と思い出せなかった。

今日は手に鉛筆をもっているおかげで、目は覚めたままだ。私には見える、かすかに見える、私の過去とはなんの関係もない奇妙なイメージが。坂道で煙を吐きながら、無数の車両を牽引する一台の機関車。どこから来て、どこに向かうのか、また、なぜ今ここに現れたかは不明である。

夢うつつのとき、私は思い出す。私の教科書が、このような方法によって、幼少期、まさに赤子の時代まで思い出せると主張していることを。すぐに、産着を来た赤子が私の目に浮かぶ。だが、それが私だとなぜわかる？　私にはまったく似ていない。むしろ、二、三週間前に義妹が産んだ子供のようだ。手がこんなに小さいのに目はこんなに大き

くて、まるで奇蹟のようだと言って彼女が私たちに見せた子だ。なんてかわいそうな子！　私の幼少期を思い出すどころではない！　今まさに幼少期を生きているおまえに、おまえの知性と健康のためには、その頃を思い出すことが重要だと知らせる手立てすら私にはない。人生を回想することが必要だと、何歳でおまえは気づくだろう？　たとえその大半が、おまえに嫌悪感をもよおさせるものであっても。そのうち、おまえは快楽を求めて、無意識に自分の小さな身体をさぐってゆくだろう。おまえの逸楽の発見は、おまえを苦痛と病に導くだろうが、病は、そのつもりのない人々からもうつされるだろう。ではどうすればいい？　おまえの揺りかごを見守ることはできない。おまえの胸では――幼子よ！――ふしぎな調合がなされてゆくだろう。毎分ひとつの試薬が投与されるのだ。おまえが病気になる確率はきわめて高い。というのは、おまえの過ごす瞬間すべてが純粋とはいえないから。それに――幼子よ！――、おまえは、私の知人たちの血を分けているから。たしかに、いま過ぎ去りつつある瞬間はけがれのないものかもしれないが、おまえを生み出すことになった果てしない時間がすべてそうとはかぎらなかった。

眠りに入る前に思い浮かぶイメージから私はだいぶ遠ざかってしまった。明日また試みることにしよう。

3

煙草

医師は、私の話を聞くと、いつから喫煙への嗜好が生まれたかを分析することから私の仕事を始めてはどうかと言った。

「お書きなさい！　ぜひ書いてください！　ご自分の姿がまるごと見えるようになりますよ」

煙草についてなら、わざわざあの肘かけ椅子で夢を見なくても、この私の机で充分に書けるはずだ。どのように始めればいいかわからないので、煙草に助けを求めよう。これまで吸ってきたどの煙草も、いま私が手にしているものとそっくりだ。

ずっと思い出すことのなかったことが、今日ただちに思い浮かぶ。私が初めて吸った煙草は、もう販売されていない。それは、一八七〇年頃にオーストリアで売られていたもので、双頭の鷲のマークの入ったボール紙の箱に詰められていた。すると今度は、ひとつの箱のまわりに、さまざまな人たちがすぐに集まってくる。みなそれぞれ特徴があり、各人の名前は思い出せるのだが、この思いがけない出会いに胸が揺り動かされるほどではない。さらに思い出すために、私は肘かけ椅子に移動する。するとその人たちの